

「トランス・ポリティクス」との共闘可能性に向けて ——「レズビアン」というポジションからの応答——

堀江有里

1. 報告へのコメント

わたしは表象研究についてはまったくの素人ですので、本日のご報告についての理論的な部分について感想を述べてから、レズビアン・スタディーズ／アクティヴィズムにたずさわってきた立場からのコメントを申し上げることにいたします。

中村さんは、報告の冒頭で、「トランス・ポリティクス」の構想について、「ジェンダーのみならず、その身体や認識をもトランスしていくことの可能性を切りひらく」ものであると定義されました。そして、その構想を今回は表象研究という枠組みのなかで考察されました。この点から着想をえて、述べていきたいと思います。

まず、ご報告の中で、事例としてオペラ《ばらの騎士》と宝塚歌劇の「男役が演じる女役」について取り上げられました。前者からは「“ごつごつした（男女に二分化されていない）抽象的な身体”の想像／創造」という点について、そして後者からは「“男の形”と“女の形”を微妙にブレンドすること」によって、「男役が演じる女役」が生み出されるプロセスについて、とても興味深くうかがいました。順番に感じたことを述べたいと思います。

中村さんが、オペラ《ばらの騎士》の分析のなかであきらかにされた、観衆による身体へのまなざしと、その変遷はひじょうに興味深いものでした。女性が男性の役を演じることで、舞台上で起こっている事柄を鑑賞する人々は、その姿を「男女に二分化されていない抽象的な身体」として把握する。中村さんはそれを「“ごつごつした”身体」と表現されました。そのような身体が想像／創造される。人々が把握する、というよりは、瞬間に、現実的なイデオロギーから解放されたファンタジーにおいて、そのような身体が獲得されていく。

しかし、わたしが考えたいのは、中村さんが提示された、その後の回路です。「“ごつごつした”抽象的な身体」は、言語化のプロセスのなかで、つまり、ロゴスの世界で理解されようとするときに、「男女二元論」に回収されていってしまうという点です。中村さんは、それでもなお、一瞬、想像／創造された「情緒的な共感」というものは、理知的な理解に先立つことによって、ファンタジーとして残り続けると指摘されました。このイメージがわたしには感覚としてわかるような気がしつつ、しかし、つかみそこねたような気もしています。そこで、確認のために、自分なりにたどりなおしてみたいと思います。

「情緒的な共感」と「理知的な理解」とのあいだには、ある種の〈断絶〉が走っているということでしょうか。それはもしくは連関しているものなのでしょうか。言ってみれば、日常生活とファンタジーという対比のなかでとらえることも可能でしょうか。二項対立的にとらえるのではなく、「どこかに残り続ける」可能性があるのであれば、「情緒的な共感」によって生み出

された人々の想像／創造は、その人自身の日常生活のなかで、あるときに「あぶく」のように生じ続けていくものなのでしょうか。より抽象的な話になって、こたえていただきにくいかもしれません。

わたしは、そこに〈言語化されないものの可能性〉のようなものがあるのではないかと感じました。わたしたちの日常生活の多くは、言語のなかで思考が生み出され、そしてそれが行動につながっているのだと思います。しかし、それだけでは表現できないことも、もちろん多くある。中村さんの分析から、もし〈言語化されないものの可能性〉のようなものが示唆されているのであれば、その点について、もう少し詳しくお話をうかがいたいと思いました。

つぎに二つ目の分析についてです。宝塚歌劇の「男役が演じる女役」の分析のなかで、その映像やファンの声を考察しながら、「男の形」と「女の形」を微妙にブレンドされながら男役が女役を演じていくことについて分析されました。しかし、そのような「微妙なブレンド」を表象する言葉が存在しない。「男でもない」、「女でもない」という、いわば「否定形」でしか語りえない事柄であるのご指摘でした。「否定形」でしか語りえないということは、すなわち、周縁化あるいは排除の論理でしか認識できない、もしくは認識されないもの、として提示されていたと思います。このような状況を鑑み、中村さんが提示されたのは、認識そのものの転換の必要性でした。そこで、「ジェンダー・クリエイティブ」という概念〔中村 2005〕を、ここでの新しい認識実践として提示されました。

この点について、わたしは中村さんにうかがいたいというよりは、一緒に考えていきたい点なのですが、「ジェンダー・クリエイティブ」の実践は、実際には、どのようにして可能になるのだろうかということ。この点は、理論を日常生活のなかでどのように実践していくか、連関させていくかという点で、森岡素直さんのコメントとも関心を共有している部分ではあると思います。

先ほどの、一つ目の事例で語られた「ファンタジー」について、それが言語化されるプロセスのなかで消されていく、つまりは既存の社会規範に回収されて、そしてその社会規範の言説が再生産されていくというご指摘がありました。その点と重ね、かつ、認識そのものの転換の必要性ということを考えてみると、そこでわたしたちは、ある種の〈迷路〉に迷い込んでしまうのではないかと、わたしは思うのです。もちろん、理論をそのまま現実の世界に当てはめるには無理がある、もしくは困難があるとは思いますが。しかし、つねに理論は、現実世界のなかから立ち上げられ、そして現実世界に影響を及ぼしているとはいえると思うのです。そのような前提のなかで、「周縁化あるいは排除の論理でしか認識できない」ものに語彙を与えてしまうということが、理知的に社会規範に回収されていくことに、どこかでつながってしまうのではないかと思います。いわば、「ファンタジー」に、言語の枠組みのなかで解釈した上で、語彙を与えてしまうことによって、それが再度、社会規範に回収されていってしまうという回路を辿るのではないかと。二つの分析をあわせてうかがいながら、そんなことを感じました。

では、このような矛盾のなかに置かれた状況を、わたしたちはどのように「切り抜ける」ことができるのか、どのような戦術が可能であるのか、という課題がそこには生まれてくると思います。もちろん、それはすぐにこたえを求めるものではなく、さきほど言いましたように一緒に考えていきたいという点です。何か具体策としてご意見をお持ちでしたら、うかがいたい

と思います。

2. 「クィア・ポリティクス」への接合可能性へ

つぎに、わたしの立場から、少し迂回するかたちにはなるかと思いますが、接点をさぐることにしたいと思います。

ご報告をうかがったで、舞台装置というコンテキストで起こることが、そのままにがしかの社会変革に即座に結びつかないということは、中村さんも述べておられることでした。それでもなお、今回のご報告の着想や分析から示唆されたことにとどまり、日常生活にいかにか切り結んでいくかということをご構想することができないか。そんなところに、わたしは関心があります。それは日常生活と理論が乖離しているということをお断りたいのではなく、先ほど述べたように、わたし自身は、日常生活におけるさまざまな実践、そこから生み出される社会運動、そして理論とが、多少のずれやそれぞれの射程範囲のちがいがあながらも、連関していると思っているからです。今日うかがったお話から、自省的に、どのような構想が可能になるのか、その萌芽だけでも考えてみることであれば、と思っています。

冒頭に申しましたとおり、わたしは、レズビアン・スタディーズ／アクティヴィズムにたずさわってきました。その立場から、中村さんが構想していらっしゃる「トランス・ポリティクス」との共闘可能性について考えてみたいと思います。

(1) レズビアンにとっての「ジェンダー・クリエイティブ」は可能か

まず、中村さんの「ジェンダー・クリエイティブ」という概念を、レズビアンについての／をめぐる事柄に適用するとすれば、どのような構想が可能なのか。ここで、レズビアンの「カミングアウト」（公言）という行為について考えてみたいと思います。とくに、日本のコンテキストにおいて、と限定したほうが良いのかもしれない。

「レズビアンである」ことを表明するという行為は、ある意味で、現存する「ジェンダー秩序」を問うるものであると、わたしは思っています。もちろん、それは“問うる”可能性をもつ、ということであって、実際に、どのように機能するかはまた別問題であるのかもしれない。

なぜ、「ジェンダー秩序」を“問うる”ものなのか。それは、「女」という立場にあてがわれたものを覆す、もしくは疑問を付す意味を含んでいると思うからです。ジェンダーとは、性別二元論の枠組みのなかでは、「女」と「男」を権力関係の差異のなかで把握する装置です。そして、その権力関係を非対称に、相補的に配置することで、「異性愛主義」という規範が生み出され、維持される。とすれば、「レズビアンである」との表明は、親密な関係性のなかに、「男」が存在しないことを意味するわけで、「男に所有されない女」であるということ表明していく行為ともなりうるわけです。それは、「女」に振り分けられた性別役割を拒否するという表明にもなりうるものだと思います。このような点から、わたしは、そこに与えられたジェンダー役割ではなく、新たな認識実践が切り開かれる可能性が存在するのではないかと考えるわけです。

また、しばしば、「レズビアン」という存在は、“存在しない”ものとして、社会のなかで認識の埒外に置かれてきたと指摘されます。“存在しない”という前提を覆すという意味でも、“ここにいる”と表明していくことは、ひとつの(抵抗)としても新たな身体論を提示しうるものとなるのではないかと思うわけです。中村さんは、「ジェンダー・クリエイティブ」という概念を、「ジェンダー化のプロセスに自覚的になる」こととして、またそこに自らが「意識的に関わる」こととして描出されました。先に述べたレズビアンのカミングアウトという行為は、ある意味で、その概念と照応可能性の高いものではないかと思えます。

しかし、単純にそのようには断言できない背景もある。疑問符を付さなければならない現実もある。昨今、感じているのですが、レズビアンにとって、カミングアウトという行為は、そのとらえられ方として「二極分化」しているのではないかということです。それは、わたし自身が、レズビアンとしてカミングアウトし、研究や運動をつづけているなかでの実感にすぎないので、今後、丁寧に言語化していく必要があると思っていることではあるのですが。それを少しご紹介しておきます。

カミングアウトが「ジェンダー・クリエイティブ」として機能しえない側面には、二つあると思えます。レズビアンにとっての／をめぐるカミングアウトの困難として、述べたいと思います。それが「二極分化」していると表現した二つの側面です。

まず、一点目は、「レズビアンである」と表明することによって、その表明者に対して向けられる“物珍しいもの”であるというまなざしです。言ってみれば、生身の身体に、奇異なまなざしが向けられるという点です。それは、たとえば、異性愛者の男性による異性愛者の男性のためのポルノグラフィのイメージであり、性行為に一元化されていくという点です。これはすでに多くのところで指摘されてきましたし、わたしもいくつか論じてきました（[掛札 1992]、[堀江 2008a]）。

そして二点目は、“見慣れたもの”として把握されるまなざしがあるのではないか、ということ、最近、感じています。レズビアンは“存在しないもの”として認識の埒外に置かれてきた。それはそれで、一定の事実ではあるでしょう。しかし、レズビアンとしてカミングアウトする人々が少しずつ、この日本でも増え始めて、「マイノリティ」として把握され始めている、という現実も、他方にはあります。奇異なまなざしを向けられることもあるかもしれないけれど、レズビアンとして表明する人々を、どこか既視的なものとしてまなざすということも、昨今、増えているのではないかと思えます。

この点は、どのような弊害を生み出すかという点、「マイノリティ」として把握されることにとって、固定的な立場を、表明した側が提示すると認識されることです。「マイノリティ」である、そこから「マイノリティ」としての権利主張をするという立場に属するものとして把握されるということです。

「ジェンダー・クリエイティブ」にはなりえないのは、このあたりのことだと、わたしは思っています。ポジションが確定してしまうと、そこから新たな視点が生まれ出せない、なかなか向けられたまなざしをずらしたり、そこから脱したりできなくなってしまう、という点です。現在、権利主張が広がっていくなかで、そのような局面を、レズビアンは迎えているのではないかと思えます。

では、あらたに「クリエイティブ」なものを構想していくことができるのか。どういう出口があるのか。これはすぐには明確に提示することはできないと思っています。カミングアウトとか、レズビアンとか、そのような、ある意味で“使い古された”ものではない、新しい語彙が必要なのだとも思います。しかし、同時に、わたしのなかには、「レズビアン」という名乗りを続けていかなければならないだろう、という思いもあります。一定の権利主張がなされてきているとはいえ、多くの人々には、レズビアンの存在は日常にはない。大学で講義を担当していても、日々、そう感じます。異性愛主義と性別二元論という二つの社会規範のなかで、レズビアン自身が、レズビアンという名乗りを続けていく。その必要性和、先のように困難が横たわっているのもう名乗る必要はないという思いと、そこには「レズビアン」という言葉をめぐって、その名づけを引き受けた途端に課せられていくジレンマがあると感じています。

（２）「トランス・ポリティクス」との共闘可能性に向けて

レズビアンのカミングアウトをめぐる困難、それはある種の隘路というか、“出口なし”の状態を意味していると、わたしは把握しています（cf. [堀江 2008b]）。それを打開するためどのような理論構築をしていけば良いのか、ということに苦悩しているわけですが、今日は、中村さんが提示された「トランス・ポリティクス」との関連のなかで、その方策を模索したいと思います。広い意味でのジェンダー／セクシュアリティをめぐる諸規範を問題化するという意味では、その作業も意味のあるものではないかと思うからです。

いまさらではあるのですが、たとえば、「クィア・ポリティクス」の可能性として、その接点を探っていくことはできないか。この点について、「トランス・ポリティクス」とは、どのように関連しうるのか、接点をもちうるのか、ということについて、後ほど、時間があれば、中村さんにもご意見をうかがいたいと思います。

「クィア (queer)」という用語は、ある意味で、ひじょうに問題含みの言葉でもあります。男性同性愛者への蔑称から当事者がその意味をとらえ返すことによって、意味づけを転換してきた言葉でもあります。しかし、その意味内容は多様であり、定義することが難しい。たとえば、大きく分けて、二つの意味で使用されていることが多いと思います。

一つには、昨今、日本でもよく見受けられるように、セクシュアル・マイノリティの総称として、「アイデンティティ」につけられた名前として「クィア」が用いられています。この場合、セクシュアル・マイノリティとは誰のことか、という問いを含みうるので、結果的に、ジェンダー／セクシュアリティをめぐる諸規範、とくに性別二元論と異性愛主義を問うという立場を含む場合もある。つまり、さまざまな立場の人々を含み込む可能性をもち、たとえば、社会規範の上に乗っかって「特権」的な生活をおくっている人々をも含んでしまうことへの批判も存在します（cf. [村山 2005：11]）。

もう一つには、パースペクティブとして「クィア」という用語が用いられている点です。異性愛主義と性別二元論を問い続けるという視点、規範を問い続ける視点として、わたしは把握しています。「問い続ける」ということは、固定した立場に立つのではなく、たえず、流動的である、あらざるをえない、ということです。学問における「クィア理論」は、このような点を強調してきたと思います。

わたしがここで「クィア・ポリティクス」として考えたいと思うことは、ひとつめの固定したアイデンティティ・カテゴリーに用いられる「クィア」ではなく、ふたつめのパースペクティブとしての「クィア」です。というのは、運動の場面でも、セクシュアル・マイノリティは、ある種の「集合的な主体」を構想してきたし、それはひじょうに意味があることだとは思いますが、しかし、限界もあるのではないかと思うからです。そもそも、セクシュアル・マイノリティというのは、多くの利害関係を含む人々をひとつの鍋のなかに放り込むようなかたちで使われている言葉です。性別二元論と異性愛主義に合致しない生き方をする人々というような、言わば、「セクシュアル・マジョリティ」ではないもの、という残余カテゴリーとしてしか、把握できないものだとわたしは思っています。であるがゆえに、具体的で政治的なアジェンダがあげられ、それがまさに言語化されるなかで、そのなかにある差異が捨象されて、消されていく。そんな危険性があると思います。そこにあるさまざまな差異をどのように汲み取っていくのか、差異を認識しながらどのように「対話」を生み出していけるのか。そう考えた場合に、わたしはもう「セクシュアル・マイノリティ」という用語自体が限界をきたしているのではないかと思っています。

そもそも、マイノリティ／マジョリティの線引きが要請されるのは、そこに社会規範による権力関係が存在するからです。その線引きを確定したようなかたちで、「セクシュアル・マイノリティ」と名乗っていくことは、そもそも揺らぎを許容しないような境界線があることを認めてしまう結果を生むのではないかと思えます。この点からも、もう少し違う方向で、アイデンティティ・カテゴリーではない、パースペクティブの「クィア」を考えたいと思っています。揺らぎのないものではなく、揺らぎを許容していくような、そして「対話」可能な、相互批判が可能な、ポリティクスをどのように構想していくことができるのか。それが「クィア・ポリティクス」の課題であると思えます。

具体的に戦略や方策を提示することはできないのですが、最後に、「ジェンダー・クリエイティブ」という概念から、わたしが考えさせられたことについて、もう一点、意見を述べておきたいと思えます。「ジェンダー・クリエイティブ」という概念は、とても刺激的だと思います。そこに新たな地平を見出し、いまだ名づけられていない事柄に語彙を与えていくことが可能になる。その点で、ひじょうに刺激的だと、わたしは感じるわけです。しかし、あえて異論を挟んでおきたいと思えます。とらえそこなっていたら、後にご指摘いただければと思います。

中村さんをご報告のなかで、観衆が創造／想像したファンタジーが言語化のなかで消されていくプロセスについて語られました。否定的に語られてきたことをとらえ返しつつ、何かを肯定的に語っていくことは、そのプロセスとあわせて考えると、どのような意味をもつのか。たとえば、「クリエイティブ」に語っていくこと／行っていくことは、魅力的であると思うのですが、しかし、わたしには懸念もあります。わたしたちは、言語のなかで生きていて、多くの認識を言語によって構築している。そして、であるからこそ、自分を表現するにしても、他者を表象するにしても、その言語によって構築された認識や思考から自由になれない側面もあると思えます。しかし、言語には、つねに社会規範が関わってくる。つまりは、どこか、社会規範によって限定された空間でしか言語を「語る」ことができないという限界性が、そこには横たわっているのではないかと思うのです。

新たな認識枠組みに、新たな語彙を与えていこうとする行為は、とても刺激的ではある。肯定的な語彙を与えていくことによって、建設的な、前向きな気持ちになることはできる。そのようなエンパワメントも必要だと痛感します。しかし、やはり、社会規範とともにある言語での表現には、新たな枠組みをつくろうとしても、わたしは、否定形でしか語れない言説というものがあるのではないかと思うのです。ファンタジーが言語化されるときに、社会規範に取り込まれていくプロセスが、その現実を表しているのではないか。社会規範を問題化するためには、たえず回収されていく危険を避けるためにも、否定形でしか語れない事柄をみつけていくしか方法はないのではないか。そんなことを考えました。

このような、わたしたちが言語のなかで思考や認識を育んでいく限界性と、ファンタジーの関係についても、またコメントをいただければと思います。以上です。

参考・引用文献

- 掛札悠子, 1992, 『「レズビアン」である, ということ』河出書房新社。
- 中村美亜, 2005, 『心に性別はあるのか? ——性同一性障害のよりよい理解とケアのために』医療文化社。
- 中村美亜, 2006, 「新しいジェンダー・アイデンティティ理論の構築に向けて ——生物・医学とジェンダー学の課題」国際基督教大学ジェンダー研究センター『ジェンダー&セクシュアリティ』第2号, 3-23頁。
- 堀江有里, 2008a, 「『承認』を求める行為と場 ——〈レズビアン・アイデンティティ〉と存在証明をめぐる」仲正昌樹編『社会理論における「理論」と「現実」』御茶の水書房, 145-165頁。
- 堀江有里, 2008b (近刊), 「〈クローゼットから出る〉ことの不/可能性 ——レズビアンのあいだに措定される〈分岐点〉をめぐる」日本解放社会学会『解放社会学研究』第22号。
- 村山敏勝, 2005, 『(見えない) 欲望に向けて ——クィア批評との対話』人文書院。